

縦横無尽 タテとヨコ色とかたちのフィールドワーク(10) : タテ系の張力と織機の型式

著者	吉本 忍
雑誌名	月刊染織
巻	279
ページ	53-55
発行年	2004-06-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/5202

縦横無尽

タテとヨコの 色とカタチの ワールドワーク

吉本忍

タテ糸の張力と織機の型式

織物を織る技術は、人類が新石器時代に獲得した主要な生活技術の一つであり、織物は、われわれの生活に欠くことのできない生活資材として、現代に至るまで世界の広範な地域で織りつづけられている。さて、そうした織物を織るためには、タテ糸に張力が備わっていることが不可欠である。このことは昨年の7月号(28号)からはじめた連載で、繰り返し述べてきたことであるが、今月号では、タテ糸の張力と織機の基本的な構造型式との関係についてあきらかにしておきたい。

タテ糸を張る方法

張力とは、ひっぱってのばす力である。したがって、織物を織るさいに必要となるタテ

糸の張力とは、タテ糸を双方向からひっぱってのばす力であり、その手段としては、織り手の身体の一部やさまざまな道具が使われてきた。それらのうちで身体の一部としては、これまでに腰と手と足を使った例を確認している。また、道具としては、棒や錘りを使った例を確認している。なお、道具のうちの棒とは、棒の類いの総称として例示したものであり、より具体的には杭や柱や立木、さらには棒を組み立ててつくられた枠も包括される。また、タテ糸を双方向からひっぱってのばすことによって、タテ糸に張力を持たせるためには、以上に述べた腰と手と足、棒と錘りのうちから二つを選択し、それらをさまざまに組み合わせさせて使っており、そうした組み

合わせについては、手と足、手と棒、足と棒、腰と足、腰と棒、棒と棒、棒(枠の一部)と棒(枠の一部)、錘りと棒、錘りと棒(枠の一部)、錘りと錘りという10種類を確認している。

織物を織るさいにタテ糸の張力は、前記のような腰と手と足といった織り手の身体の一部や、棒や錘りなどの道具との組み合わせによって生み出されているが、そうした組み合わせは、織機の構造型式を考えるうえできわめて基本的な要素として浮かびあがってくる。

織機を分類する

これまでの連載で、わたしは腰機(Back tension loom)、地機(ground loom)、枠機(frame loom)、錘り機(warp-weighted loom)という名称をしばしば使用してきた。これらの名称は、いずれも織機の基本的な構造型式をタテ糸の張力との関係で提示したものであり、同様の考え方で前記のタテ糸に張力を持たせるための10種類の組み合わせごとに、織機の基本的な構造型式を考えてみると、腰機、地機、枠機、錘り機のほかに、手機(hand tension loom)や足機(foot tension loom)と表現すべき織機の存在とともに、織機を必要としない織りの存在もまたあきらかとなってくる。したがって、このようにタテ糸の張力に注目してみるならば、世界各地でおこなわれてきた織りは、次のような織機を必要としない1型式の織りと、9型式の織機(1型式の手機、1型式の足機、2型式の腰機、1型式の地機、1型式の枠機、3型式の錘り機)を使用した機織りに大別される。

① 織機を必要としない織り

この織りでは、タテ糸の一方を織り手の足、



写真1 織機を必要としない織り(八丈島、榎立:1987年)



写真2 手機による機織り(八丈島、榎立:1987年)



写真4 腰機による機織り・1 (ラオス、サラワン近郊：1992年)



写真3 足機による機織り (カメルーン、バメッシング：2000年)

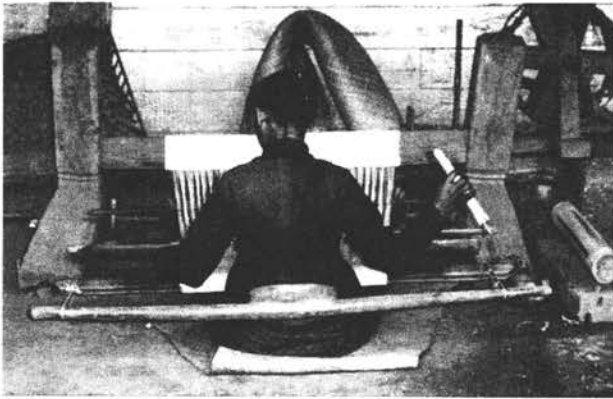


写真5 腰機による機織り・2 (インドネシア、ジャワ島クルック：1992年)



写真6 地機による機織り (イラン、ケルマンシャー近郊：1998年)

他方を織り手の手でひっぱることによってタテ糸に張力を付与している。このような織りの具体例としては、先月号で紹介したわが国のワラジづくり(写真1)があげられる。

② 手機による機織り

この機織りでは、タテ糸の一方を棒に固定し、他方を織り手の手でひっぱることによってタテ糸に張力を付与している。このような機織りの具体例としては、①と同様に先月号で紹介した、わが国のワラジ台を使用したワラジづくり(写真2)があげられる。

③ 足機による機織り

この機織りでは、タテ糸の一方を棒に固定し、他方を織り手の足でひっぱることによってタテ糸に張力を付与している。このよ

うな機織りの具体例としては、アフリカのコンゴ民主共和国(旧ザイール)のプショングをはじめとする民族やカメルーンのテイカール人のもとでおこなわれているラフイアを糸素材とした機織り(写真3)があげられる。ただし、テイカール人の足機による機織りは、織りはじめの段階においてのみ認められるものであり、ある程度織り進んだ段階からは、⑦の枠機による機織りに移行する。

④ 腰機による機織り・1

この機織りでは、タテ糸の一方を織り手の足、他方を織り手の腰でひっぱることによってタテ糸に張力を付与している。このような機織りの具体例としては、ラオス南部に住むカトゥウ人による木綿の経編織物の機織り(写真4)があげられる。

⑤ 腰機による機織り・2

この機織りでは、タテ糸の一方を棒に固定し、他方を織り手の腰でひっぱることによってタテ糸に張力を付与している。このような機織りの具体例としては、わが国のいざり機を使用した機織りや、インドネシアのジャワ島における木綿の格子縞の機織り(写真5)があげられる。

⑥ 地機による機織り

この機織りでは、タテ糸の一方を棒(杭、あるいは2本の杭にわたされた横木)に固定し、他方も棒(2本の杭にわたされた横木)に固定してひっぱることによってタテ糸に張力を付与している。このような機織りの具体例としては、イランのクルド人によるヤギの毛を糸素材としたテントの覆い布の機織り(写真6)があげられる。

⑦ 枠機による機織り

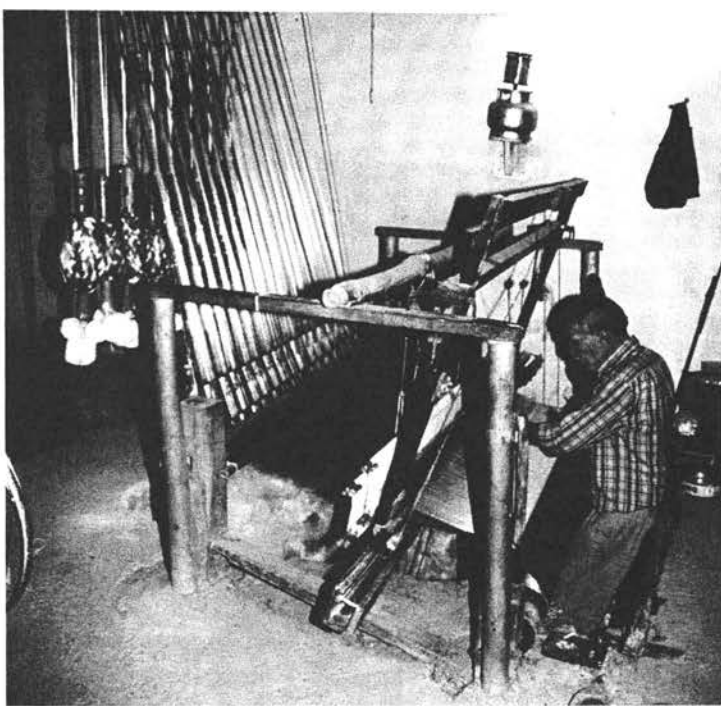


写真9
 錘り機による機織り・2 (トルコ、ガジ・アンテップ：2003年)



写真7
 杵機による機織り (トルコ、ヘレケ：2003年)

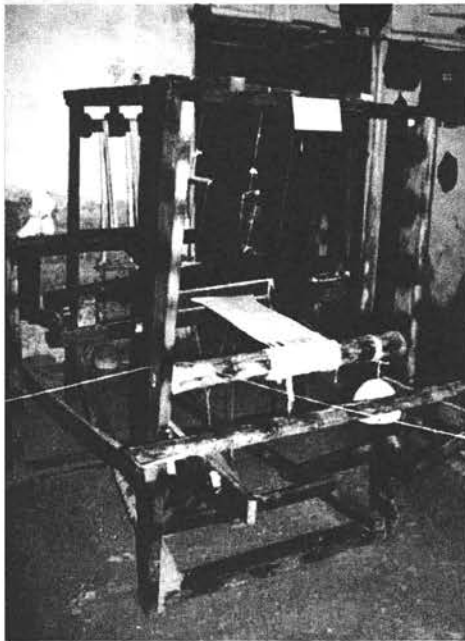


写真10 錘り機による機織り・3
 (ウズベキスタン、ヌラタ：1999年)



写真8 錘り機による機織り・1
 (ノルウェー、マンダレン：1995年)

この機織りでは、タテ糸の一方を杵を構成している棒に固定し、他方も杵を構成している棒に固定してひっぱるることによって、タテ糸に張力を付与している。このような機織りの具体例としては、トルコのシルク・カーペットの機織り(写真7)があげられる。なお、このような杵機による機織りのうちには、わが国でムシロを織るために使用されている苧機や、一般に高機と呼ばれている織機 (treadle loom) も包括しており、高機の機台に組み込まれたタテ巻き棒や布巻き棒は、杵を構成する棒の延長線上に含まれるものとしてとらえている。

⑧ 錘り機による機織り・1

この機織りでは、タテ糸の一方を棒に固定し、他方を錘りでひっぱるることによってタテ糸に張力を付与している。このような機

織りの具体例としては、ノルウェー北部に住むサーミ人のもとでおこなわれているウールの織物の機織り(写真8)があげられる。

⑨ 錘り機による機織り・2
 この機織りでは、タテ糸の一方を杵を構成している棒に固定し、他方を錘りでひっぱることによってタテ糸に張力を付与している。このような機織りの具体例としては、トルコのガジ・アンテップにおける絹を糸素材とした紋織物の機織り(写真9)があげられる。なお、杵を構成している棒は、具体的には高機の機台に組み込まれた布巻き棒であり、この布巻き棒は、⑦で述べた高機と同様に杵を構成する棒の延長線上に含まれるものとしてとらえている。

⑩ 錘り機による機織り・3

この機織りでは、タテ糸の一方を錘り、他方も錘りでひっぱることによってタテ糸に張力を付与している。このような機織りの具体例としては、ウズベキスタンのウズベク人による木綿の機織り(写真10)があげられる。なお、この錘り機は、具体的には高機であり、錘りは機台に組み込まれたタテ巻き棒と布巻き棒に、それぞれかけわたされている。

以上では、世界各地でおこなわれている織りをタテ糸の張力に注目して、10種類に大別し、それらの概要を紹介してきたが、次号からは、今月号の分類にもとづいて、手機、足機、腰機、地機、杵機、錘り機という織機の基本的な構造型式や分布などについて、より詳しく、順次紹介していく予定である。

(国立民族学博物館民族文化研究部教授)

よしもと・しのぶ